

芥川龍之介著「私の文壇に出るまで」—芥川龍之介全集 第二巻— 岩波書店 1995年12月8日刊
を読む

私の文壇に出るまで—初めは歴史家を志望—

1. 少し脇道に入つて、私のこれまで読んだものなどに就いて話せば、小学時代、私の近所に貸本屋があつて、高い棚に講^{かうしやく}積の本などが並^{なら}んでゐたが、私はそれを端から端まですつかり読み尽くしてしまつた。
2. さういふものから導かれて、一番最初に『八犬伝』を読み、続いて『西遊記』、『水滸伝』、馬琴のもの、三馬のもの、一九のもの、近松のものを読み初めた。
3. 徳富蘆花の『思ひ出の記』や、『自然と人生』は、高等小学一年の時に読んだ。
4. その中で『自然と人生』は幾らか影響を受けたやうに思つた。
5. 中学時代には漢詩を可^{かな}成り読み、小説では泉鏡花のものに没頭して、その^{ことごと}悉くを読んだ。
6. その他夏目さんのもの、森さんのものも大抵^{たいてい}皆読んでゐる。
7. 中学から高等学校時代にかけて、徳川時代の浄瑠璃や小説を読んだ。
8. その時分から近松の中に出て来る色男、文化文政の色男といふものに対する同情は、決してもつことが出来なかつた。
9. 次に西洋のものを色々読み始めた。
10. 当時の自然主義運動によつて日本に流行したツルゲネーフ、イプセン、モウパッサンなどを^{でたらめ}出鱈目に^{あさ}読み獵つた。
11. 高等学校を卒業して大学に入つてからは、支那の小説に転じて、『珠邨談怪』や『新齋諧』や、『西廂記』、『琵琶記』などを無闇と読んだ。
12. 又日本の作家のものでは、志賀直哉氏の『留女』をよく読み、武者小路氏のものも殆ど全部読んだと思ふ。

13. 殊にロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』には甚く感動させられて、途中でやめるのが惜しくて、大学の講義を聴きに行かなかつたことがよくあつた。
14. しかし、私は遂に藤村の詩だとか、『天地有情』といったやうな日本の詩からは、何等の影響をも受けないでしまった。
15. かうして、今迄のところでは、甚だ平凡な一介の読書子として来た。
16. それ以外に何にもありはしない。
17. たゞ夏目先生の許へ一年ばかり行つてみるうちに、芸術上の訓練ばかりでなく、人生としての訓練を叩き起されたと云ふ気がする。

P227 ~ 228

<コメント>

芥川龍之介全集第二巻の「私の文壇に出るまで」というエッセイを読むと、龍之介が幼いころから大学を出るまでどのような本に親しんだかよくわかります。無論これ以外にも山のように読んだと思われるが、現代の小学生、中学生、高校生、大学生がどのような本を読めばよいかの参考になると思い書き抜かせていただきました。名前みの表示でよくわからなければ、歴史や文学史の参考書などをご確認ください。

2020年2月22日(土)